平成３０年度第３回産業・経済部会（第２回研究会）議事録

日　時：平成３１年１月１７日（木）9:30～11:50
場　所：北海道赤れんが庁舎２階２号会議室
出席者：坂下部会長、奥田委員、青木委員、板垣委員、市川委員、
柿澤委員、小田委員、佐藤委員、韓委員、満薗委員、
宮澤委員、宮田委員、小川委員
事務局：鬮原室長、中谷主幹、伊藤主査、山本主事

１　開　会

２　議　事

（１）奥田委員報告　産業・経済「資料」の扱いについての試案
（２）満薗委員報告　商業部門における研究作業開始の状況
（３）その他

３　閉　会

１　開　会

２　議　事

（１）　産業・経済「資料」の扱いについての試案

発表者：奥田委員

【資料１】をもとに以下について説明

１．資料編重視についての道史編さん大綱（および参考資料）における考え方

２．対象の時期範囲について

３．基礎的統計・年表について

４．北海道現代史の時期区分と概説についての試案

―各委員からの感想及び質疑―

【坂下部会長】

１番目については具体的なイメージが固まってきた。基礎統計を大項目毎の末尾に置くことについては、産業・経済編独自で判断してよいか。

【事務局】

産業・経済編だけに統計資料が載っていても全く構わないと思う。なお、前回、他の県史でも統計は載っていると申したが、実際には、行政刊行物の統計が文章を解説する資料として載っていたもので、統計だけを後ろにまとめてあるものはなかったので、訂正する。青森県史などでは、現代に関してはいろいろな統計資料が揃っているので敢えて載せる必要はないとして、現代の部分の統計は端折っていた。

【奥田委員】

あまり大量に載せるのは資料編の本来の趣旨から外れてしまうし何頁も載せるのは無理だが、産業・経済編の特殊性である、統計に拠る検証のためには、分野毎に最低限、戦後から一貫した統計データを載せることも場合によっては必要であると思い意見提起をした。

【坂下部会長】

例えば前回私が報告した農地改革の数字資料は、通史編で扱うなど仕分けの問題が出てくるので、悩むところ。

【満薗委員】

統計では、データの取り方上、長期的には連続性が担保できないことが多々あり、そのような場合には積極的に道史に載せる意味が問われる。そうであれば刊行物としての道史ではなくホームページなどを充実させるという方向も考えられる。

【奥田委員】

確かに利用する側の立場からは、印刷されている統計は利用しづらく、印刷されている形がよいのかは問題がある。連続性が途切れている場合はその意味を注釈に載せることが科学性の担保の面から必要。

【坂下部会長】

紙で残す場合は何かあった場合でも確実に残るが、データの場合長期で考えるときちんと残るのか、それを誰がどう管理するのかという問題が出てくる。

基礎的な統計は通史を書く場合にも必要なものであり、それを載せて印刷するのか、別の形で公表するかはさておき、基礎的な統計はつくるということでよろしいか。公表の方法は別の部会

とも議論するようにさせていただきたい。

資料編に掲載する資料は一次資料に限定されるのかどうかという問題で、写真についてはどう扱うのか。

【事務局】

千葉県史の場合は、資料編の冒頭にカラーの写真を使って全体をわかりやすく説明してから資料編の中身に入っているが、通常は、写真は通史編に入れている。最近はふんだんに入れるような傾向にある。

【奥田委員】

前回の青木先生のご意見の中で、迫真性の担保という点で写真のようなものをと仰っており、前回の部会で承認されたかと思う。

【坂下部会長】

証言を証言集から拾ってくることはいろいろなところでされていると思うが、ここで言っているのは自分でヒアリングしたものや、それに準じることですか。

【事務局】

特に政治・行政の分野では、オーラルヒストリーというものが注目されており、元知事のインタビューも準備されている。産業・経済の分野でもあり得る。山口県史では証言編というのが１巻あり、労組の委員長の証言があるなど各分野で入れている。

【小川委員】

証言を取る、インタビューを行うのは各委員の任意か、それとも編さん事業の一事業として位置づけているものか。

【事務局】

各委員の任意になり希望する方だけやっていただく。

【佐藤委員】

証言の件では、道庁のどなたかが同行し、録音してくれるのか。

【事務局】

事務局の方で、テープに録音しそれを文字に起こして、またそれを確認してもらうなどの一連の手続きを行う。

【坂下部会長】

２番目の対象時期については、始まりについては、基本的には 1945 年から始めることになるが関連してそれ以前から始めることは差し支えないとされ、終わりについても 2000 年からすでに 20 年ほど経過しており、これと同様に扱うということでよろしいか。最近急激に発展してきた産業があるかと思うが、我々の仕事が終わって何十年後かにまた新しいものが書かれ、その時に当然書き直される性質のものであるので、暫定版で書いておくということで問題はないという理解でよろしいか。

３番目の統計は先程議論したが、年表は基本的に事務局の方で作ることになっていた。

【事務局】

先生方に方針だけ決めていただき事務局の方で作業する。前回の『新北海道史』の時に７０年代までの年表を作っており、これを延ばす形で考えている。産業・経済、政治・行政など分野別に分かれているので、その中に産業・経済の動向が入ってくる。

【奥田委員】

原稿をつくった段階で、付け加えた方がよいものがあれば、付け加える余地はあるのか。

【事務局】
　提起していただければ、対応する。
【坂下部会長】
　前回私が提案した資料編対応年表を作って作業される方の場合は、個別に年表を作って書き込んでいく必要があると思う。いずれにせよ、各自で年表を作る作業が出てくると思うので、最後にそれを合わせて対応していただくということでよろしいか。
　４番目の時期区分については、皆さんが一通り作成されたものを掲げてみてから考えてもよいのではないか。
【宮澤委員】
　前回と前々回の部会に出席していないので、その時に話されたことかもしれないが、参考資料の中の、発掘した資料で残すべきものは残すという際の選定基準は議論されているか。
　残すべき資料の残し方について、道史を刊行した後、道史に掲載されるものは残るとしても、それ以外の資料はどうなるのか。リストで残すのか。道史の中にリスト集のようなものを作るのか。あるいはホームページに載せるのか。道民が使えるものにするという視点で、検索できるものにするとか、どのように考えられているかお聞きしたい。
　また、掲載する際のボリュームについて何か議論されたのか。道史の中に文書そのものを載せる場合の頁数や、各分野でどれくらいあるのか、リストアップを始めたら大量にあると思うので、選択してどれくらいのボリュームに抑えるかなどの基準が必要になると思う。
【事務局】
　集めた資料の残し方については、道立文書館に引き継ぐことになる。前回の新北海道史の時も同様に文書館に引き継がれていて、載らなかった資料も道民が利用できるようになっている。その目録を文書館の方で作るし、発掘した資料を道民の方が利用できることになる。道史を作るのにその分野の先生が収集した資料は参考資料として残すが、全部を網羅的に残すのかといえば、それは個別の判断になる。
【坂下部会長】
　資料調査に行ったら事務局の方で資料を撮影し、その中からある程度選んでいただいて、撮影したものは全て編さん室で保存されて、後で文書館に移される。頑張ってもらえれば残るということ。今は資料が増え過ぎて困っているところもあるが、そこは専門の目で見て残すべきところは写真撮影をしてもらい、その中でも大事なものは道史に掲載するということになる。実際の保存の仕方については私もイメージはないが、作業は全て事務局がやってくれるので、今の段階では先生方に宝の山を見つけていただきたいということ。この後の報告でどのように資料調査をしたかという話があると思う。
【奥田委員】
　収集した資料をアーカイブズとして残していくということで、印刷・刊行されなかった資料の項目だけでも載せることを考えてもいいのでは。文書館に行けばこのような資料があるという情報を提供することができれば親切かなと思う。
【坂下部会長】
　資料を引き継いだ文書館の方で目録を公開していただき、資料編に掲載するよりは資料を検索できる仕組みを作るという方法もあると思う。それは今後刊行が終了するまで検討していきたいと思う。

（２） 商業部門における研究作業開始の状況

発表者：満薗委員

【資料３】をもとに以下について説明

・商業部門の方針として、『新北海道史』と同様、商業全体に広く目配りした枠組みは踏襲しつつ、地域商業という視点を加えて大型店の動向や商店街の動きにも力点を置きたい。

・戦後日本流通史の中では小売業の展開が流通の動きをかなり規定しており、北海道の特徴に関心がある。

・今回の道史は資料の調査・収集、に重点を置いている取り組み。自分は歴史畑の人間なので、個別の実態がわかる一次資料のようなものをなるべく頑張って集めたいと考えて取り組んでいる。ただ、2000 年くらいまでが対象のため、企業にどういう資料があるのか全体的に見たいと言っても、多分見せてくれないだろうと思っており、その辺をどうクリアするか、攻め方も含めて取り組んでいかなければいけないと思っている。

・具体的には、まずは商工会議所を回ろうという方針で資料調査を行っている。調整政策と振興政策の両面で、商工会議所はかなり重要な役割を果たしてきたため、そこに残る資料は商業の動きをよく捉えたものが多い。

・戦後日本の流通政策は振興政策と調整政策が２本柱。そのうち調整政策は 2000 年の大店法廃止により終焉したというのが通説的理解。だが、振興政策の中に地域商業の視点を見出し、調整政策の運用実態を「まちづくり」との関連で捉え直すことにより、2000 年で区切る考え方に対して、近年の「まちづくり」をめぐる活発な取り組みを展望した柔軟な捉え方が可能ではないか。

・資料調査の進捗状況としては、基本資料として刊行物を中心に収集中。また、商工会議所等の調査も開始。今後、基本資料の収集と商工会議所のほか、商店街組織や地場企業等へのアプローチも検討。

・資料収集はカメラ撮影で行っているが、原文書が残されていくためのケアも必要。

―各委員からの感想及び質疑―

【坂下部会長】

私も商業分野には、農協の方で関わるが、商工会議所の資料は興味深い。

【奥田委員】

進み方について具体的にイメージできた。このリストの中で写真撮影されたのは何点くらいか。

【事務局】

満園先生からの指示で小樽商工会議所は６０点、札幌商工会議所は２０点を撮影。

【板垣委員】

どの先生がどこに調査に行くとか、何を見に行くのかという情報を事前にいただければ、他の先生も一緒に行くことで効率的でスムーズに進むと思う。

【事務局】

事務局で思いついた部分ではお声かけしているが、我々がわからない部分で関連している場合があるかもしれないので、よろしければ、全ての先生方にメールでお知らせすることも可能。

【板垣委員】

ぜひお願いしたい。

【奥田委員】
たとえ自分には関わらなくても、進んでいることがわかるだけでも、お知らせいただけるとありがたい。
【坂下部会長】
どんな古い文献があるのかということもわかってよいと思う。
【奥田委員】
基本資料の収集では、各地域の資料をどのようにリストアップされたのか。
【満園委員】
皆さんにも配られている文書館所蔵の刊行物をリストアップしたものから拾っているが、自分の勉強のために、以前から戦後北海道の流通関係の資料を、道立図書館のＨＰでキーワード検索をかけてリストアップしていた。地域毎の文献は地元の図書館にしかないものが多いので、地域ごとの図書館レベルでも検索した。主に道の刊行物や行政資料、商工会議所の調査資料のほか、記念誌などを拾ったが、資料になりそうなものに限ったので論文レベルの研究文献はない。
【板垣委員】
収集はどのような形で行われているのか。
【事務局】
収集方法としては、資料をスキャンしてＰＤＦにしＣＤに焼いて先生に提供している。
（資料検索に関し、資料２について説明。）
【宮澤委員】
写真で全頁もしくはかなりの頁を保存して、それをＣＤに焼いて我々が見れるということで、私の認識が違っていたが、その写真は道民もアクセスできる形で保存して公開する方向で撮られているのか。
【事務局】
編さんが終わった後で文書館に引き継がれることになる。それを一般道民に見せるか見せないかは、原本所蔵者に確認し、「何年間かは見せないでくれ」と言われる場合もあるかもしれないが、将来的には誰もが利用できるようにしていくことになる。

（３）その他
【小川委員】
私は北海道博物館の学芸副館長ですが、道史編さんには、北海道博物館内のアイヌ文化研究センター長の立場で関わらせていただいている。昨年度の道史編さんの基本方針を検討する会議でも、主に北海道史のあり方と、新しく北海道史を編さんする時にアイヌの歴史をどのような形で入れていくのが望ましいのかということで関わらせていただいた。
その中でも申し上げたことだが、これまで刊行されていた北海道史、最初の「北海道史」から「新北海道史」に至るまでは、社会・文化の終わりの方にアイヌ関係のセクションが一章別に設けられていて、その時代の政治、行政、産業、教育、文化が論じられた後に、その頃のアイヌに対する施策、それに対するアイヌの人たちの動きが述べられるというつくりになっていた。それはアイヌ以外の多数者の側からその時代のアイヌのことを知りたいという点では便利。博物館におけるアイヌの展示も大体、代表的な文物や近現代の目立つ活動だけがクローズアップされており、当たり前に今の社会に生きている姿がなかなか意識されない。しかし、アイヌも北海道の歴史をつくり社会に参画して時代を作ってきたという当たり前の姿から見れば、政治のところにも

産業のところにも観光のところにも様々に関わっているはず。

このことは、今までの北海道史を含めた自治体史編さんの中で、共通してきた問題だったと感じておりましたし、私の周りでもそういった意見が強かった。今回全ての部会に関わらせていただき、例えば、商業、農業など、社会の様々な側面に関わってアイヌの歴史が当たり前にあるというつくりを取らせていただきたい。

実際にどうするのかは、これからということになるが、引き続き部会に出席させていただいて、事業が進んでいくに従って私以外の分野の方にお願いすることがあると思っている。

機会があれば、各部会に関わるアイヌの歴史を簡単なレポートにさせていただくとか、資料としてはこんなものがあるということをお話させていただければと思いますし、逆に各分野の先生の方からもご教示いただいて認識共有できればと思う。

【小田委員】

今の話は大変重要なお話で、例えば私は開発問題を担当しておりますが、二風谷のダム問題とかで関わった時にいろいろなお話を聞いたのですが、そういう問題も含めて広く扱うということか。

【小川委員】

二風谷のダムの問題のほか、北海道のさまざまな地域開発が地元の人たちと軋轢を生む中で、闘った人たちの中にはアイヌの人たちもいたということもある。アイヌの章に押し込められるよりはむしろ、巻の中の項目立てとか、あるいは項目を立てなくても実は資料の中に入っている、ということができるといいと思っている。

【小田委員】

私も二風谷問題についてはアイヌの人たちといろいろ話をしており、今のお話を聞いてどうやって位置付けたらいいのかなと感じる。

【坂下部会長】

やってみないとわからないこともあるが、索引のようなものを作るなど、工夫が必要かと思う。

【小川委員】

そうですね。最終的に索引を作る時に、アイヌの項目を引くといろいろなところに行きつくことになっているのもあり得る。

【坂下部会長】

全体の中に溶け込むということも難しいところがないわけではないので、やってみていろいろな事例を出してもらいたいと思う。

これからの進め方について、私としては、原則月１回ということで皆さんから報告をいただいて、作業の促進につなげるということで進めたいと思っている。今年度中にはあと１回は開催したいので、報告者と日程の調整をさせていただきたい。

次回の報告者は私の方で個別に交渉させていただく。

３　閉　会

（了）